

## 国際書房と神田神保町

専修大学大学院法務研究科教授 加藤 克佳

数号前(本カタログ94号)に、葛原力三教授が、国際書房との出会いについて軽妙洒脱なエッセイを書かれた。教授は、筆者とほぼ同世代の、しかも同じドイツ法を比較対象とする優れた刑法学者であり、本稿は、その二番煎じにすらならない。しかし、40年以上続く国際書房(以下、敬称略)との馴初めは、筆者にとってもやはり衝撃的であった。

大学院に入学後暫くして、先輩に誘われ、(当時)神田神保町にあった国際書房「ショールーム」に初めて足を踏み入れた。それまでも図書館や資料室で、書架に並ぶ法学洋書(以下、洋雑誌も含む)を見たことはあったが、大学外で、しかも明るいショールームで、多くの洋書が「群をなしている」のを見たのは初めてであった。先輩は、慣れた様子で目指す書籍を確認し、何冊か購入された。しかし、筆者は、知らない世界から受けた衝撃が大きく、不思議な高揚感に包まれながら、その日は何も買わず(買えず)辞去した。その後、カタログを送っていただくことになり、そこに添付の葉書で注文することも可能であったが、何せ洋書は高く内容も見えないで買うのは危険とばかりに、そしてまたあの高揚感が忘れられず、かのショールームにしばしば通うことにした。語学力も専門知識も、そして財力も乏しい中、ほとんどは手に取る(その後元に戻す)だけだったが、たまに実際に購入することもあった。しかし、その場合も、(当時)店長だった古文学者のような風貌(?)のKさんに、「この本どうですか?」、「あれとこれとで迷っているのですが…」などという質問や相談をすることが多かった。すると、Kさん(Mr.ショールーム! 法律洋書の「生き字引」であられた)は、「そうですね、これは定評があります。」、「研究テーマとの関係では、まずはこちらでしょう。」などと、若筆者にも丁寧に対応してくださった。そのおかげで、「この本は高いけど、買う方がいい。」と勝手に納得し、購入を決断したことも多かったのである。

神田神保町は、本郷、早稲田を凌ぐ書店街、特に古書店街である(であった)。国際書房に赴く機会には、神保町の古書店街を探索し、和書を実際に手に取るのも大きな愉しみであった。本来は研究(勉強)に集中すべきなのに、財力の乏しさから新本が買えず、古書を求めることが多かった。また、絶版本を、しかも廉価で見つけ、しかし買うかどうか相当逡巡して、購入を決断したこともあった。こちらは和書についてであったので、内容はあまり悩まなかったが、店の奥に陣取る気難しそうな店主さんに質問や相談をしたこともあった。

このような書籍を巡る徘徊(?)は、筆者が東京圏外の大学に着任してからも暫くは続いた。地方の大学では、まだ蔵書も多くなく、特に洋書については、アクセスがあまり容易でない状況だったからである。上京の際には、主目的と併せて、神田神保町にもよく立ち寄った。もっとも、場所的・時間的隔りがあり、それはそう長く続かなかった。何より、和書は実際に手に取ることが容易になり、また、手に取らずに購入することも増えた。洋書についても、カタログ等を通じて注文することが普通になったのである。なお、筆者は、ほぼその頃、ドイツに留学した。今度はそのショールームで覚えた高揚感が通常の書店でも持てること期待したが、授業で使う条文集や基本的な書籍の在庫は多いものの、専門的な書籍等一般向けでないものは注文が原則であり、実際に手に取ることはさほど多くなかった(もっとも、大学図書館等では、多くの書籍や資料へのアクセスに恵まれた。ただ、それも、図書館や研究所によってかなりの開きがあった)。

あれから相当の年月を経て、筆者は今、神田神保町にある大学にご縁をいただいている。そうすると、毎日が書籍巡りになるか、というと、実は全くそうっていない(かのショールームもなくなったり、神保町の書店街もかなり縮小している)。その原因は、(元々さほどでなかった)研究意欲・熱意や体力が大幅に減退したこともあるが、一番は、社会の情報化が著しく進み、書籍を手にとって購入するという形態が、大きく変化・減少したことに求められるかもしれない。注文方法は、もはや葉書はおろか電話等でもなく、メールやウェブを通じて行われる。そして、書籍の形も、電子版が相当に増えており、(「試し読み」等は可能であるが)「実際に手に取る」ということすら想定できない。それでも、筆者は、実際に手に取るのに近い形で購入を検討でき、それに関して質問や相談ができると、大きな助けになると確信する。時代の流れには逆らえず、様式も変化していくが、わが師である国際書房には、本カタログを含め、今後もその役割を期待したいと思う。